

	7	卒業後の進路と類型の選択の結びつきを強め、ビジネスに関する基礎的な知識の定着とそれをベースにした応用力を身につける。専門科目の学びに対する積極的な姿勢とビジネス実践力の向上を図るために、きめ細かな指導を行う。また、多くの入試形態に対応できるよう全商主催検定1級の取得率の向上に努めるとともに、類型ごとのPBL学習や社会との結びつきを強めた実践的課題研究活動に取り組む。		A	A	A	B			A	A	・学科改変後4回目の卒業生となる。専門学科における専門性の理解や類型選択を通して自己の興味・関心の在り様を深めた学びの中で、各自が目指す進路を見極め、こだわりを持った進路の実現への取り組みができたと感じる。生徒各自が、主体的に自分の未来を見つめ、適性や特技を生かして、様々な入試方法で進路の実現に臨み、結果を出している。	・新教育課程および入試科目の変更、また検定の改廃に対応した教育カリキュラムについて教科および教育課程委員会が検討し、選択科目等の配置を行った。	・文科省が定める新教育課程上の学科科目だけでなく、学校設定科目および選択科目の適切な設置による教育カリキュラムの見直しを進めることができた。	ビジネス探究科
SSH事業の推進	8	I期SSH指定5年間の取組の成果を基盤にII期SSH事業の発展に取り組み、科学技術系人材の育成に関する新機軸となる取組を実践し、より充実した事業を展開する。4つの新規取組を実践して、5つの力の育成する。	探究発表会、理数セミナー、校外学習、海外研修、各種コンテストや発表会への参加、SSH運営指導委員会など	A	A	A	B		A	B	A	・I期SSH事業の取組を改善し深化させることができた。地域社会、大学、企業等の校外コミュニティとの連携を行い、課題研究に取り入れることができた。三科協働を目指し、ONO探究デー（三科合同発表会）に向けて、各学科が協働できる方法を模索した。課題解決型授業（PBL）の実施して、平素の授業と探究活動とを連携させた。相互評価による生徒の変容を見取ることができた。	・校外コミュニティとの連携に関しては、近隣の高等学校との連携を深めていきたい。三科協働についてはテーマ設定の時期が異なることや各学科の研究テーマの共有ができなかった。課題解決型授業（PBL）と相互評価に関しては、学校全体に広めていくことが重要である。	・近隣の高等学校と連携するために、本校のSSH事業への積極的な参加を促し、また自然科学部（物理部、化学部、生物部、天文部）での連携を実施する。三科協働を目指し、まずは互いの取組に触れる機会（三科合同発表会等）を増やし、協働できる具体的な事業を実施していく必要がある。課題解決型授業（PBL）と相互評価に関しては、その効果を学校全体に普及させることが必要である。	SSH探究推進
生徒が自己の未来をデザインする力を育てるキャリア教育の充実	9	進路HRや進路行事を通して、社会の実態や働く意義を学び、職業観を育てる。さらに自身の適性を見極め、将来の社会貢献のあり方を考え、キャリアデザインを実践する。それらを実現するための方策を考え、それらを実行しようとする姿勢を育てる。	職業講演会（1年生9月）	A			A	B			A	・職業講演会（1年）と大学出張講義（2年）等の進路行事を通して、各生徒が社会や職業、大学での学問領域やその奥深さを知ることができた。これをきっかけとして興味の幅を広げた生徒も多い。それぞれの進路意識の高揚に役立った。	・1年生の職業講演会では、新しい講師の開拓に苦勞するが、学年との協力でマンネリ化しないように心がけなければならない。 ・2年生の大学出張講義では、国公立大学に依頼することが多いが、ビジネス探究科の生徒の志望大学を考慮して関西有名私大への講師依頼も拡大していく必要がある。	・職業講演会、大学出張講義共に、講師の方の一方通行の講義になってしまいがちなので、もっとインタラクティブに行う工夫が必要だと考える。できる限り事前に講演内容を伺って、生徒に「予習」をさせて、当日には質疑応答をもっと活発にするよう考えたい。	進路指導
生徒が自身の適性を見極め、自らの意思と責任で主体的に進路を選択できる能力や態度を育成する。			大学出張講義（2年生6月）	A				B		A	A	・2年生の希望生徒3名が参加した。それぞれ実りある実習となり、進路選択や社会貢献についての意識を高めた。	・意義のある行事であることに議論の余地はないが、2年生の8月実施ということで、部活動との関係が難しい場面があった。さらに8月は、進路行事（大学訪問等）以外にも数多くの行事が予定されているため、希望はあっても参加を見送った生徒がいるのではないかとと思われる。	・インターンシップについては、2年で就職（公務員を含む）を考えている生徒には原則勧めていきたいが、進学希望の生徒は大学訪問等の他の学校外行事への参加を奨励する。	
インターンシップ（2年生8月）				A	B					A	A				

重点事項：豊かな人間性を持った生徒の育成

努力事項	No.	具体的取り組み	具体的な行事等	自己評価													総合評価	成 果	課 題	改 善 策 等	主担当
				評 価 (A:よく出来た B:出来た C:あまり出来なかった D:出来なかった) ※網掛け箇所記入する。																	
				探究心	レジリエンス	課題解決能力	俯瞰力	突破力	発信力	多様性	共創力	批判的思考力	探究心	レジリエンス	課題解決能力	俯瞰力					
規律ある態度の育成 自己を律する精神を涵養し、個人と集団との関係を踏まえ、相互に個性を尊重できる生徒を育成する。	10	生活3原則を徹底することで生徒の基本的な生活習慣の確立に努める。	集団宿泊訓練/風紀委員会				B		B		B				B	・8時10分の朝学開始の時間に着席できていない生徒が増加しており、評議委員会等で呼びかけたが改善は見られなかった。 ・挨拶運動を校内外で実施した。	・遅刻者の状況に応じた指導が必要で、一律に指導することは有効ではない。生徒指導部専任の教員と学年・担任との情報交換が不可欠である。 ・教師も挨拶を意識し、生活三原則の徹底を必要とする必要がある。	・遅刻の多い生徒を学年と協力して個別指導を行う。また、不登校傾向の生徒については、家庭と医療機関との連携も必要である。 ・SHRや授業などで色々な教師からマナー向上や生活三原則についての話をする。	生徒指導		
	11	部活動の活性化を推進しつつ、効率的な練習計画によって学習との両立を図る。	評議委員会	A			B		B		A				B	・多くの部活動が近畿大会や全国大会に出場し、成果を上げることができた。	・生徒は学習と部活動の両立の難しさを感じており、時間の使い方に課題がある。 ・教員側の文武両道に対する意識が低下している。	・部顧問・担任・教科担当の連携を強化し、学習時間を確保できるよう努める。 ・規律ある行動が取れる生徒の育成が望まれる。	生徒指導		
12 学校行事を通して、学校・学年やクラスへの帰属意識を高めるとともに、リーダーを育成する。			部活動	B	A	B									B	・全校生の90%以上が部活動に所属している。学習と部活動を両立し、自主的な活動ができるようになってきている。	・運動部の部員数が減少傾向にあり、途中退部する生徒が以前より増加した。 ・より充実した活動となるように活動時間や内容の改善に努める必要があるのではないか。	・生徒の自主性だけでなく、各部顧問がより積極的に部員と関わることで部活動を活性化させていく。	生徒指導		
			新入生歓迎遠足		A					A		A			A	・3年生として各クラスが創意工夫をこらし、新入生の緊張を解きほぐすための楽しい時間を創り出すことができた。				3学年	
			球技大会		A				A	A		A			A	・体育委員を中心に、クラスの個性を発揮して進めることができた。互いに協力し合い、各試合を存分に楽しむことができた。	・3年生ではクラスや学年で取り組む行事が最後になっていくが、連帯を感じることができた機会を大切にしていこう。	・生徒たちが自主性やリーダーシップを発揮して活動することができるよう、限られた時間を計画的に運用するよう支援する。			
			体育大会		A				A			A			A	・応援リーダーを中心に、各人が責任感と協調性を持って取り組み、最終学年として発刺とした演技を行った。学年の団結も一層深まった。					
			新入生歓迎遠足		A					A		A			A	・1年生を親切にリードする姿に成長を感じた。3年生の後ろ姿を見て来年度自分たちが主体となったときの構想を練っているようであった。	・特になし	・特になし	2学年		
			球技大会		A				A	A		A			A	・各種目において一生懸命に取り組む姿が見られた。また、生徒会執行部を中心として運営にも尽力した。	・特になし	・特になし			
			体育大会		A				A			A			A	・応援合戦においては、リーダーを中心に学年が一体となり充実した演技を行うことができた。	・特になし	・特になし			
			修学旅行	A	A	A	A		B	A	A				A	余裕のある旅程で大きな事故やトラブル等なく全行程を終えられた。文化体験や交流を行う企画を充実させた。しよりの電子化を試行した。	・特になし	・特になし			
			集団宿泊訓練	A	A	A	A		A	A	A	B			A	・神鍋高原での集団宿泊訓練に変わり、但馬ドームで集団行動を実施した。充実した行事となった。			1学年		
			新入生歓迎遠足		B						A	A			A	・新入生歓迎遠足では、上級生が新入生を上手にリードしてくれたので、各班ともに和やかな雰囲気ゲーム等を楽しんでいた。	・神鍋高原での集団宿泊訓練は初めてであり、各行事の時間設定を見直していく必要がある。 ・1年4月の行事が多い。授業時数の確保が望まれる。	・集団宿泊訓練までの準備期間が少ないので、3月からの準備が望ましい。とくに『生き方討議』の準備期間が短すぎた。入学式からの準備期間を確保するか、クオリティーが下がることを致し方ないと受け入れるかである。			
		体育大会		A				A		B	A			A	・体育大会では応援合戦において学年演技を行った。リーダーを中心に短期間の練習であったが完成度の高い演技を見せた。						

ボランティア精神の滋養 奉仕活動に積極的に参加することで、ボランティア精神の滋養を図るとともに、地域との連携を深め、地域社会から信頼される生徒を育成する。	13	高齢者福祉施設への訪問、幼稚園・小学校・中学校との交流、地域の祭・イベント参加など「ふるさと共創プロジェクト」に積極的に取り組むことを通して、地域とともに歩む学校づくりを進め、地域との信頼関係を確立するとともに、関心をもって地域課題等の理解に努め、地域への愛着や誇りを育む教育に取り組む。	ふるさと共創プロジェクト		B	A	A			A	B	A	・生徒会・運動部・文化部・ビジネス探究科の生徒を中心に、様々な活動を行った。通学路の清掃活動、地元社会福祉協議会・国際交流協会・商店街・老人福祉施設・近隣の小学校・幼稚園などの交流、地域のイベント等への参加を通して、「地域の人のつながりの再生」や「自治体や企業等との協働による地域貢献活動」など、有意義で充実した取り組みを行うことができた。	・地域との交流活動を、特定の運動部・文化部の活動から、学校全体の取り組みへと発展させるとともに、地域の多様な課題に対応した「ふるさと貢献・活性化」のあり方について再考する。	・地域との交流活動について積極的な情報収集を行い、関係団体との連携をより密にし、有効な実施計画を立てるとともに、連携団体の拡充を図る。 ・総合的な学習の時間「小野探究」を活用しながら、地域の課題についてより関心を高める。	総務	
	14	学校周辺の清掃活動を実施することで、奉仕精神を高める。	クリーンキャンペーン	A		A				A		A	・年2回（6月・12月）に開催したが、200名を超える生徒が自主的に参加し、PTAと共に通学路をはじめ学校周辺の清掃活動を積極的に行うことができた。	・清掃箇所や内容をより充実させていきたい。清掃箇所と生徒数がアンバランスでなかには時間を持て余す生徒がいた。	・清掃活動を行う範囲をもう少し広げるなど、より充実した活動となるように内容を見直す。 ・行内の美化活動も行う。	生徒指導	
人権教育の充実 人間尊重の精神を涵養し、日常生活において人権を尊ぶ態度を育てる。自らを見つめ、よりよい生き方を追求できる人間を育成する。	15	職員の人権意識を高めるとともに、各学年の「生き方ホームルーム」を充実させる。	生き方HRの実施	A		B					A	A	・本校独自の人権学習アンケートの実施結果をもとに、中学校での取り組み内容等から生徒の実態を把握できた。 ・学年ごとの学習テーマ（LGBTQなど）に沿って学年の人権教育担当者を中心に班別研修を計画・実施し、意見交換を行うことができた。 ・生徒の司会進行と討論形式の実施に生徒が主体的に取り組めた。	・「生き方ホームルーム」の実施にあたっては、学年の人権教育担当者に依存するところが大きい。	・部と学年が情報共有をしっかりと行う。 ・昨今の課題に対応した内容を実施する。	生徒指導	
	16	海外の人々との交流を通して、文化や価値観の多様性を認識させるとともに、日本を再認識する機会とする。	オーストラリアの姉妹校Brentwood Secondary College、台湾の国立台湾大学等との交流	A		B		A	A		B	A	・オーストラリア国際交流事業の実施 令和7年7月23日（水）～8月6日（水）の15日間、プレントウッド・セカンダリー・カレッジ（本校姉妹校）に本校生徒18名が訪問した。異文化理解を促進し、国際貢献や平和への意識を高めるとともに、実用的な英語運用能力の向上を図ることができた。 ・SSH海外研修の実施 令和8年3月15日（日）～17日（火）の2泊3日で科学探究科2年の生徒5名と普通科2年の生徒4名が台湾にて研修を行う。国立台湾大学、大屯火山観測所での講義、実験実習、陽明山国家公園や台北植物園でのフィールド調査、及び亜熱帯地域の植生調査や台湾固有の植生調査を実施する。台湾の自然環境を学び、グローバルな視点を養うとともに、現地の方々との交流により英語を用いたコミュニケーション能力を育成する。	・生徒にはどのような研修が効果的なのか、現地プログラムの計画段階で検討が必要かもしれない。 ・一昨年度の台湾研修から大きく内容を変更したため、今年度の取組の成果と課題を分析して次年度につなげることができる。	・来年度は普通科、科学探究科、ビジネス探究科が海外研修で協働して取り組む探究課題にはどのようなものがあるのか、具体的な現地プログラムを考えながら計画することが求められている。 ・英語によるコミュニケーション力の向上には日頃の取組が重要であり、日常的に英語でのコミュニケーション力を育成することを意識した授業やプログラムを実施したい。	SSH探究推進	
	17	生徒・保護者への教育相談の充実とともに、教職員にはカウンセリングマインド研修会を実施し、生徒に関する共通理解を図る。	カウンセリングマインド研修会 教育相談(年間24回) 学校保健委員会											・年間を通して、2名のスクールカウンセラーによる教育相談を実施し、保護者・学年・担任とも情報交換を丁寧に実施して、早期の対応ができるように努めた。	・生徒の状況に応じて、教育相談の実施方法、回数、内容の改善を重ねていく。 ・感染症の流行時期が変化してきている状況下で年間を通して予防喚起を行い、臨機応変に適切に対応できるようにする。	・生徒会の保健委員会への情報提供・共有を行い、生徒が自主的に保健活動に取り組むことにより、活動への理解を深め、積極的に取り組めるように指導していく。	保健
	18	生徒に対し年3回、「いじめに関するアンケート」を実施し、いじめの早期発見・早期対応・未然防止に努める。												・アンケートの記述内容から生徒のいじめに対する考えを知ることができた。また、普段口に出して言えないような悩みを記入し、担任と話をする機会をつくることができた。	・生徒の「いじめはなくなる」「いじめられている方にも原因がある」などの意識を見直させる必要がある。 ・アンケート結果からだけではわからないことにも気をつけていかなければならない。 ・SNS等でのいじめに対しての対応策を講じる必要がある。	・今年度も実施したが、担任や部活顧問や学年団だけで対応するのではなく生徒指導部等連携をとって組織として対応していくことがこれまで以上に必要である。	生徒指導
19	いじめに対する職員研修を行い、全ての生徒が安心して学校生活を送ることができるよう、「学校いじめ基本方針」の徹底と教員の共通認識を図り、チームとして問題に立ち向かう体制を整える。	いじめアンケート 人権研修会			A						A	A	・2学期はじめに職員研修を実施、いじめ案件の詳しい内容や対策についての説明と、これからの対応について協議することができた。 ・本校でのいじめ対応チームについて確認し、学校として教師間協力の大切さを再認識した。	・生徒指導部が中心となって研修を行ったが、専門家に講義をお願いしたい。 ・研修会だけではなく、定期的に情報共有する機会も必要ではないかと考える。	・組織的に計画し、研修することが大切であることを再認識した。それによって、研修内容、講師の依頼などを協議して決定することができた。また、部会での定期的な情報交換を実施する。	生徒指導	

重点事項：地域に信頼される学校づくり

努力事項	No.	具体的取り組み	具体的な行事等	自己評価															
				評価（A:よく出来た B:出来た C:あまり出来なかった D:出来なかった） ※網掛け箇所記入する。															
				探究心	レジリエンス	課題解決能力	俯瞰力	突破力	発信力	多様性	共創力	批判的思考力	総合評価	成果	課題	改善策等	主担当		
情報発信の手段と内容の充実 公式ウェブサイト、学校公開等で最新の情報を保護者・地域住民等に発信し、理解と参画意識を醸成するとともに、地域に開かれた学校づくりを進める。	20	公式ウェブサイト及び学校・学科案内パンフレットを充実させるとともに、オープン・ハイスクールや学校公開の内容に創意工夫を加えていく。	オープン・ハイスクール								A		A		A	・学校案内や各種資料を準備し、中学校訪問、オープン・ハイスクール等の機会に中学生やその保護者に配布することで、本校の特色や魅力を発信することができた。 ・学校公開の機会に、文化的・体育的行事、オープン・ハイスクール、課題研究・探究発表会、PTAとの共催行事などを計画した。保護者をはじめ多くの来校者があり、生徒の活動の様子を実際に見聞してもらうことによって、本校の魅力を発信するという目的が概ね達成できた。	・オープン・ハイスクールを含む学校公開の実施や学校案内の配布等は、中学生の進路決定に大きな影響力を持つことを再認識し、今後とも学校として職員・生徒共々一体となった効果的な取り組みが必要とされる。	・本校の教育環境の実態や生徒の活動の様子を公式ウェブサイトや学校・学科パンフレット、さらにオープン・ハイスクール等の学校公開の場で、より一層効果的に発信できるように工夫する。 ・本校生徒の活動を前面に押し出し、生徒の意見やアイデア、中学校側の要望などを取り入れながら、さらなる充実を図るとともに、「スクールポリシー」をどのように効果的に発信するかを工夫する。	総務
	21	中学校訪問やオープン・ハイスクール、中学校単位の学校説明会への参加などの機会を通して、中学生やその保護者、中学校教員等に対して、本校の特色・魅力を広く情報発信していく。	中学校訪問 オープン・ハイスクール								A		A		A	・学校案内や各種資料を中学校訪問やオープン・ハイスクール等の機会に中学生やその保護者に配布することによって、本校の特色や魅力をより効果的に発信することができた。 ・オープン・ハイスクールにおいて、体験授業・実習・実験、在校生との交流会（座談会）、部活動見学等を通して、中学生に本校での生活について理解を深めてもらうとともに、本校生徒の主体性を最大限に生かすことで、中学生の本校への理解を手助けすることができた。	・北播地域の中学生生徒数の減少が続くなかで、旧北播学区以外への積極的な広報活動やPR活動を充実させること。 ・3学科で構成される本校の魅力とともに、それぞれの科の指導方針や教育活動の実際、進路実績などについて、より一層幅広くきめ細かな情報発信をすること。	・オープン・ハイスクールなどの学校公開をさらに魅力あるものにするための取り組みを工夫する。 ・中学校訪問の機会を通して、出身中学校生徒の高校生活の様子、進路状況なども伝え、情報交換をすすめるとともに魅力を発信する。また、専門学科を含めて本校全体の指導方針や教育活動の実際、進路実績などについて、旧北播学区だけでなく可能な範囲で第3学区、さらには全県への情報発信をしていく。	総務
	22	「課題研究」「フィールド探究」では、実在する組織や人々との結びつきを強めた実践的活動に取り組み、研究の成果が”誰かの手助けになる”社会貢献活動を中心とする。「創造探究」では専門の学会や外部の発表会に生徒を積極的な参加を促し、成果の情報発信と普及を行う。また、取組の成果を蜻蛉祭やオープンハイスクールなどで発表し、中学生や保護者など外部へ情報発信する。	蜻蛉祭 課題研究発表会 課題研究 創造探究 オープン・ハイスクール 小野サイエンス教室	A							A		B		B	・蜻蛉祭では、探究活動等の展示活動だけではなく連携企業の新商品試食会、商品販売などの実践的活動、調査活動を行うことが出来た。今までの学びの成果を確認するとともに、企画を実行するための行動力を養うだけでなく、協働することの必要性を理解する取り組みとなった。	・商品販売において、多くの来客によって行列ができて混雑する場面もあり、動線の確保が課題であった。	・生徒指導部および生徒会執行部との連携をしっかりとるようにする。	ビジネス探究科
教職員の意識の高揚 学校公開の来校者アンケートや学校評価アンケートにより、課題を明確にして、教職員が各部署で改善に努める。	23	生徒・保護者・教員に対する学校評価アンケートを実施して自己点検を行い、日々の教育活動を活性化させる。														・次代を拓く”ONOPROGRESS”における～人間力を育む9つの力～から、教育活動を通して、生徒にどの様な「力」の育成が期待できるかの目標を立て、その習得状況を具体的・段階的に評価することを継続した。	・昨年度からの取り組み”ONOPROGRESS”、実際の活動状況から「9つの力」がどう育成されているのかの基準の設定と正確な指針に基づいた評価が出来ているのかが課題である。	・学校評価結果を各科、各部、学年等において検証し、来年度以降の教育活動の計画立案及び実施への改善に活かしていくことが不可欠である。	学校評価
	24	学期ごとに「生き方ホームルーム」の事前研修会を開き、効果的な授業方法の検討と人権意識の向上を図る。	生き方ホームルーム研修会			A							A		A	・人権教育に対する共通理解を図るため、各学年の人権教育担当者や専門部との連絡をとり、学年外の職員も含めて学年別の事前研修会をおこなった。意見交換を行い、学習内容について検討することができた。	・事前研修会が必ずしも全員参加での実施ではなかった。担当者が大きな負担を感じることがないように、生き方HRの計画立案に必要な資料の収集や整理を行う。 ・グループ討議での生徒の発言をしっかりと掌握し、フォローする。	・年度末の職員研修会でこの一年の取り組みを共有し、次年度の計画立案をより改善できるようにする。 ・さまざまな思いや事情を抱えた生徒がいることへの気付きと配慮への気配りを心掛ける。	生徒指導 ・人権

	32 「総合的な探究の時間」や「創造探究」において、サイエンスファシリテーターの活用や卒業生との連携、大阪大学、京都大学、神戸大学、兵庫教育大学や兵庫県立大学などとの高大連携により研究内容の充実を図る。	総合的な探究の時間 創造探究	A		A	B		A		B	B	<p>・「創造探究」では課題設定、中間発表での振り返りと方向修正、成果発表など一連の取組の概要を理解することができた。探究心や粘り強く取り組む姿勢、プレゼンテーション能力などを育成することができた。</p> <p>・「総合的な探究の時間」では、昨年の取組を改善、発展させ、探究の能力と意欲を育成することができた。地元企業、行政と連携することができた。</p>	<p>・普通科の探究活動は、3年間を見通した指導計画を取りまとめ、学校全体で共有することが求められる。</p> <p>・科学探究科での取組の成果を普通科の活動にも反映させたい。</p>	<p>・教員間の探究に関する情報の共有、3年間を通じた探究活動のスタンダードの作成と教員間の共有などが求められる。</p>	科学 探究科
--	--	-------------------	---	--	---	---	--	---	--	---	---	---	--	---	-----------